

企画展 「釧路のまちと人」の開催

戸田 恭司*

はじめに

2019(令和元)年12月に、釧路のかつてのまちなみや建物を振り返る写真パネル展を開催しました。中高年を中心にさまざまな年代の方々が会場を訪れました。一人でじっくりと、また、ご夫婦やお仲間でお互い言葉を交わしながらそれぞれご覧になられている姿を拝見していました。中には三世代で来場されて、写真を前におばあちゃんがお孫さんに語る姿は印象的でした。

この経験をふまえて、まちなみの写真を時系列に並べるとともに、当時の暮らしに関わる収蔵資料を加えて、釧路のまちなみとその暮らしの移り変わりをテーマとした展示を企画しました。展示資料を交えて、その概略を紹介します。

展示の構成と各テーマ

展示の構成として、生活資料の展示とまちの風景写真の2本立てとしました。写真は、市民グループ・真砂町倶楽部(代表：木村浩章氏)が所有するデータを中心に、収蔵資料のデータを加えて使用しました。真砂町倶楽部は、かつての釧路のまちなみや建物などの写真並びに画像データを収集する活動を行っており、個人所有の貴重な写真の発掘にもつながっております。

展示内容に6つのテーマを設けて、5つまでを会場のウォールケース内での展示とし、6つ目はまちなみ写真で紹介しました。実際には、会場入り口から見て向かって右側のウォールケースに生活資料を、左側にはパーテーションを設置して写真を展示する2つの流れを作りました。



写真1 展示会場

テーマ1：釧路へやってきた人々

釧路のまちなみは現在の米町・南大通からつくられ始め、幣舞橋の架設(1900年)と釧路駅の開業(1901年)によって、さらにまちなみは広がっていきました。「まち」と言って

*釧路市立博物館

イメージしたのは商業者。彼らは米町・真砂町(現南大通)に店舗を構えると、しだいにまちなみができあがっていき、さらに開業する店が続きました。

明治時代に開業した商業者のうち、当時の店舗が現存する渡邊虎蔵商店と、かつて「近江商人」と呼ばれた滋賀県出身の商業者を取り上げました。なお、渡邊虎蔵商店だった建物は市内最古の民家でもあり、地域の歴史を紹介する「米町ふるさと館」として再整備され、その一部が公開されています。

テーマ2：まちの「お店屋さん」

真砂町(現南大通)で米穀雑貨を扱う商店を開業した岐阜県出身の佐々木米太郎は、釧路米穀雑貨商組合長として経済界で活躍、後に釧路市議・議長となり、活躍の場を政界にも広げ、また郷土の顕彰にも尽力しました。現存する同店の土蔵は、市民の手によって商業関係を含む地域の暮らしを物語る資料を保管・公開する施設となって残されています。ここでは同店の初荷風景写真を紹介しました。このほか、商品名の入ったつい立てや看板・提灯、また秤など、ほかの商店が残された資料も展示しました。



写真2 テーマ2「まちのお店屋さん」

テーマ3：戦時の暮らし

1945(昭和20)年7月に北海道各地で空襲がありましたが、釧路は室蘭・根室に次いで市街地で大きな被害を受け、施設の破壊や民家の焼失などでまちなみが失われました。弾痕が残る幣舞橋橋げた(部分)や民家の屋根のトタン板、手押し消火ポンプなどを展示しました。

テーマ4：冬を過ごす

開催時期にあわせて、冬を取り上げてみました。二重まわしや角巻を身にまとった人々が行き交い、屋内では石炭ストーブが暖房の主役だった時代を紹介。中でもルンペンストーブは学校や会社、一般の住宅などさまざまな場所で

使われました。展示のストープは30年ほど前まで市内の小学校で利用されたものです。

テーマ5：進むくらしの電化

やがて、一般家庭で電気が使われる暮らしの道具が広がり、新製品が販売されるとそれまで使われていた物が廃棄されていく、今につながる暮らしとなっていったことを紹介しました。結果として、それ以降の暮らしの道具がそれほど今に残されていないことにも言及しました。

テーマ6：写真に見るまちと人

絵葉書からのデータを中心に、まちのようすがわかる内容のものをピックアップしました。時代で言うと1910年代から1990年代まで、明治末から平成の始めまでの釧路のまちを記録した数々です。トピック的にいくつか取り上げて簡単な解説もつけてみました。



写真3 テーマ6「写真に見るまちと人」

撮影年が最も古いのは1910（明治43）年撮影の葬儀風景です。被葬者は当時の消防組組長で、白装束の遺族や参列者、輿を担ぐ人々、故人の名を記した幟など、現在の葬儀とは異なるようすを知ることができます。

幣舞橋は釧路のまちを代表する場所であり、シンボリックな存在です。1900（明治33）年に架設され、1909（同42）年に2代目、1915（大正4）年に3代目と、それぞれ架け替えられています。1928（昭和3）年には木橋から鉄筋コンクリート製に替わった4代目が完成。北海道内の三大名橋の一つとして数えられました。1976（同51）年、現在の5代目に替わっています。



写真4 3代目幣舞橋

写真4の3代目は橋の長さ200mあまり。現在は124mですから、かつては釧路川の幅がもっと広がったことがわかります。橋上には、徒歩でわたる人々のほかは2台の馬車らしき姿が見えるだけです。

1900（明治33）年の町制施行により釧路町となった当時は人口1万人を数える程度だったまちも、翌年には鉄道という新たな交通手段が加わって徐々に人口も増加し、市街地も広がりを見せてきました。明治の終わりには2万7千人あまりとなりました。

大正時代に入り、漁業をはじめ、石炭・製紙と、まちの産業の規模が大きくなって人口も増加。釧路町長（次いで釧路区長となる）林田則友は「釧路町施設事業計画」を策定してまちづくりを進めました。

この時期の大きな出来事として、1920（大正9）年8月に発生した洪水によって市街地は浸水被害を受けました。当時の被災状況が絵葉書として残されています。写真5は釧路川にかかる鉄道（現JR根室本線）の橋とその周辺の様子で、白っぽく見える部分はすべて冠水しています。また、写真6は、市街地が冠水して家財道具などを運ぶ人々のようすをとらえています。



写真5 氾濫した釧路川

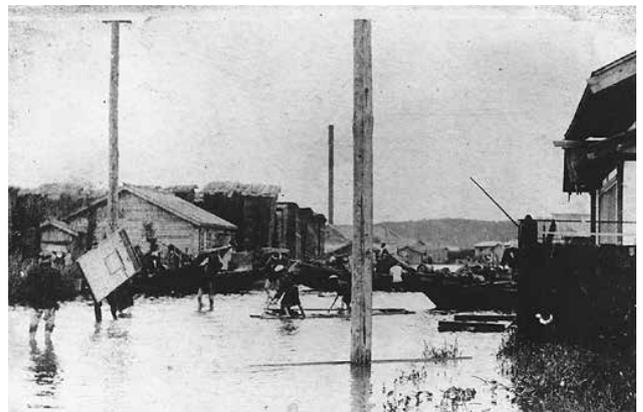


写真6 冠水した中心街

また、中心街においては規模の大きい火災の発生が相次ぎました。1913（大正2）年から1926（同15）年までの間、100戸以上が焼失する火災が計7回も発生。道路幅の拡幅、

上水道の敷設なども急がれました。

次は1929(昭和4)年、幣舞橋のもとに設置された消防本部の望楼から撮影されたまちなみのようすです。この頃には、当初まちなみがつくられた橋南(幣舞橋より南側の地域)から橋北(橋より北側で釧路駅までの間の地域。当時は西幣舞と呼ばれた)にまちの中心が移ってきており、橋南から商店が移転する、あるいは支店を構えるという形にも現れていました。



写真7 橋北地区のまちなみ

写真7は、現在の北大通3丁目あたりから末広町・栄町方向を望んだもので、中央やや右の大きな建物は娯楽施設の恵比寿座です。その周辺では建物が立ち並んでいますが、後方に目を移すと建物の姿がスッパリと途切れており、さらに後方に広がっているのは湿原でしょうか。

丸三鶴屋は、新潟県出身の両角榮治が1906(明治39)年に真砂町(現南大通)で開業した丸三越後屋呉服店がルーツです。釧路で初めての百貨店であり、鉄筋コンクリート3階建て一部4階建て、全館スチーム暖房、水洗トイレなどの近代的な設備を整え、多種多様な商品から客が自由に選んで購入するという、これまでとは異なる商法は人々の目には新鮮に映ったことでしょう。橋北地区が新たなまちの中心になりつつあった当時、丸三鶴屋はまちのシンボルになっていきました。

先にも述べましたが、1945(昭和20)年7月の空襲によっ



写真8 丸三鶴屋(真砂町倶楽部蔵)

て中心街は被災しました。戦後、国挙げての産業の復興に努めましたが、釧路は漁業と石炭にそれを求めました。産業の復興・発展はまちの復興につながり、昭和20年代後半から30年代にかけて、それまでにはない人口の急激な増加となって現れてきます。



写真9 魚揚場

写真9は1955(昭和30)年頃の魚揚場。市場で売買された(?)魚があふればかりに積み込まれた木箱の数に圧倒されます。9月の撮影と記された写真で、時期的に魚はサンマと思われます。今となっては全くの幻の光景です。この場所は現在、フィッシャーマンズワーフMOOとなり、市外からの観光客が足を運んでいます。



写真10 十字街付近(真砂町倶楽部蔵)

続いて、1956(昭和31)年のまちのメインストリート・北大通で、手前の十字街から幣舞橋方を望む一枚です。写真10では、警官が交通整理をしており、そこを路線バスが通り過ぎようとしています。背後には丸三鶴屋、呉服店から数えて創業50年の記念セール中のように、まちの賑わいが感じられます。

写真11は1963(昭和38)年の空撮で、幣舞町から幣舞橋方向を望んでいます。手前の大きな建物は市立病院、付近には公民館・市役所その他官公庁がいくつも見えますが、これらの建物はほぼ姿を消しました。また、幣舞橋の向かって左側(河口側)には漁船が所狭しと集結しています。釧路港が漁獲量日本一となるのは6年後の1969(昭和44)年

のこと。水産都市釧路を伺わせる一枚です。



写真11 幣舞町周辺(真砂町倶楽部蔵)

これら写真に続いて、1932(昭和7)年の橋北・橋南地区の市街図を展示しました。商店や公共施設などが掲載されていますので、当時のまちを知るものとして貴重です。来場者にはこの2点をじっくりとご覧いただき、当時へタイムスリップしていただけたらとの思いも込めたつもりでした。

このほか、小ケースには商店に関わる資料を展示しました。大正時代の引札は1901(明治34)年創業の商店がお得意様への正月のご挨拶にと配られたもの。笑顔の恵比寿・大黒が描かれて、今年も商売繁盛を願う気持ちが伝わってきます。この商店は、戦前は米穀雑貨店として、戦後は果物店として現在も北大通で営業されています。

また、商品を収納する紙袋や包装紙、書店のブックカバーなど、普段暮らしの中で見慣れているものも展示しました。すでに廃業された商店のものがほとんどですが、これら身近なものも資料になることが伝わったでしょうか。



写真12 紙袋と包装紙

思い出コーナー

来場者ご自身の当時の思い出をカードに綴っていたいただき、会場で紹介するコーナーを設けました。会場を訪れた他の皆さんにも当時の出来事などを思い出していただくことを狙いました。公開聞き取り調査と言えるかもしれません。カードの数こそ多くはありませんが、思い出が思い出

を呼び起こして書かれたようすも見られました。書いていただいた思い出は貴重なまちの記憶として残したいと思います。



写真13 思い出コーナー

フロアトーク

3日間、計6回を予定していましたが、期間中に新型コロナウイルス感染症のまん延防止措置の対象地域に北海道も加えられたことから1日、計2回の開催にとどまりました。こちらは展示内容の紹介と、参加者の方々から伺った当時の思い出の記録化を狙っていました。事業の周知が不十分だったこともあり、参加者はごく少数でした。代わりに、フェイスブックを通じて展示を解説する動画の投稿を試みました。

おわりに

企画展の開幕後に展示の修正・追加を余儀なくされ、来場者がこちらで想定した動線でご覧いただけていないなど、担当者としては内容の詰めの甘さが目立ち、自らの力不足を強く感じました。

会場では時折、来場者同士で写真を前に思い出を語り合っている姿を見かけたり、また直接当時のお話を伺ったりすることもあり、2019年の時と同様に写真の持つ力を再認識しました。

今後も市民に広く呼びかけて写真(データ含む)の収集を継続するとともに、皆さんがお持ちのさまざまなまちの思い出がまちの記憶を残すことにつながることも伝えながら、こちらも収集する機会を作っていく必要性を感じました。

最後になりましたが、今回の企画展開催に当たりまして真砂町倶楽部並びに伊藤真司氏には資料提供でご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

*企画展「釧路のまちと人～移り変わる風景と暮らし」

会期：2021(令和3)年12月18日～2022(令和4)

年3月20日

会場：釧路市立博物館2階特別展示室